



| | |
|--------------|---|
| Title | 〈曖昧化〉の構造：夏目漱石『心』論 |
| Author(s) | 徳永，光展 |
| Citation | 大阪大学，2005，博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/45714 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|---------------|--|
| 氏 名 | とく なが みつ ひろ 徳 永 光 展 |
| 博士の専攻分野の名称 | 博 士 (文 学) |
| 学 位 記 番 号 | 第 1 9 1 2 5 号 |
| 学 位 授 与 年 月 日 | 平成 17 年 3 月 25 日 |
| 学 位 授 与 の 要 件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻 |
| 学 位 論 文 名 | 〈曖昧化〉の構造—夏目漱石『心』論— |
| 論 文 審 査 委 員 | (主査) 教 授 出 原 隆 俊 (副査) 教 授 内 藤 高 教 授 飯 倉 洋 一 |

論 文 内 容 の 要 旨

漱石の『心』研究史は、そのまま日本近代文学の作品研究方法論史といえるほど研究文献が膨大化している。その先行研究を徹底的に収集し、分析することを通して、『心』受容史に変革を迫り、研究史論を書き換える可能性を探ろうとするものである。

本論文は、第一章「本研究の概要」、第二章「作品論の歴史的展開」、第三章「構造論の到達点と課題」、第四章「作品構成上の諸問題」、第五章「登場人物の年齢確定」、第六章「青年の過去回顧的意識」、第七章「青年の自己認識と記述法」、第八章「遺書の重層的意識構造」、第九章「先生の認識と回顧」からなり、本文は四百字詰め原稿用紙に換算して、およそ五百三十枚である。それに膨大な〈参考文献一覧〉が付されている。

第一章では、「精緻な議論を目指せば作品が曖昧なままにしている問題点を浮き彫りにできること」を論じる。第二章では、先生を漱石と見立てる同時代批評から、作品論からテキスト論に至る 1980 年代の研究史論として、「渾然とした研究動向」を検討する。第三章では、構造を追う議論と細部の扱いをめぐる議論や、〈語り手〉の主観性や空白の扱いについて言及する。第四章は、以上を踏まえながら、「作品が曖昧な印象を強める構造を抱える事実」を指摘する。第五章は、「作品内時間を確定し、作中人物の年齢を復元することで作品の輪郭を明確にしようと」試みる。第六章は、「私」の手記執筆の時間が「視点の置き方次第で解釈が変容する様子」を提示する。第七章は、「私」の、東京と郷土との「二項対立」が「先生」のそれと「重ね合わされている状況」を論じる。第八章は、遺書の「論理的矛盾」について、「執筆という行為そのものが抱え持つ不安定性として捉えるべき」と主張する。第九章は、遺書を「ひたすら負の強迫観念にこだわり続けるのが自殺正当化という主題へ進む意図の下で執筆された」と主張する。

全体として、「『心』という作品の背後に潜む書き手の意識」を跡付けて、「整合しない解釈が折り重なる」ことになることを指摘し、「矛盾をも含んだ情報を分析の中で曖昧な作品構造を見出し」て、作品解釈の可能性を論じている。体験した時点と遺書と手記の執筆時点との認識の差異を一貫して見据えようとしている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

膨大な研究史を自らの主観によって偏重することなく、正面から受け止め、全面的に視野に入れるという果敢な挑

戦をしている姿勢は高く評価できるものである。その上で、さまざまな課題について一步でも考察を進めようとする
ことがよく伝わる論文だということができる。

文末が過去形であるか現在形であるかを明確にしたうえでの議論や、「若い」という言葉の使用の実態を丹念に追
うこと、複数の人物によって捉えられた唯一の人物であるのが、「先生」の妻であることなど、従来の研究が
見落としてきたことへの目配りもある。「先生」と出会ったときの「静」の年齢の想定についても、意外性を思わせ
るものがある。また、若い男女の出会いのあり方の問題として、他の作者の作品への目を向けることなどにも、より
正確な読解に接近する手がかりとなりえよう。

何よりも、各課題についてどのような精緻なアプローチを行っても、〈曖昧〉という問題に行き着かざるを得ない
という論点は、単に部分的な指摘にとどまるものではないだけに十分な説得力を持つものということができる。この
ことをさらに展開すれば、新たな視野が広がる可能性がある。

一方で、満ち足りないものを残している部分があることも否定できない。膨大な先行文献に丹念に当たった労は評
価できるが、どれにも等距離に接している感が否めない。本来、全面的に否定をすべきものもあれば、敬服するしか
ない論文も含まれているはずである。したがって、論文の迫力という点でいささか物足りない印象がある。

さらに、「〈曖昧化〉の構造」という用語を使う限り、〈曖昧化〉が作者によって意識的になされたものだという判
断があるのか、という問いかけが生まれ得る。また、執筆までの時間が手記や遺書の変容につながるという理解も、
やや機械的であり、〈作者〉という存在の問題につながっていくことへの意識が薄弱だといわざるを得ない。

しかし、こういうように満ち足りないものを残しつつも、正面から全面的に『心』に挑もうとして、新しい見解も
含めて、従来の研究を推し進めていることは否定できない。よって、本論文が博士（文学）の学位にふさわしいとも
のと認定する。